

2022.12.15



地域日本語支援ニュース こだま 第 426 号

ともに生きる

～地域で、日本で、そして世界で～

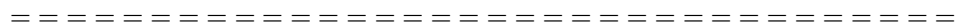


★—— メールマガジンをお読みいただき、ありがとうございます。——★

【地域日本語支援ニュース 「こだま」】は、日本語教育に関する事業を全国で行っている公益社団法人国際日本語普及協会（AJALT）発行のメールマガジンです。各地域で在住外国人に対する日本語・生活支援に携わっている方々に役立つ情報の共有を目指していきます。

★—— 皆様からのご意見、ご感想をお待ちしています。——★

編集部：<https://www.ajalt.org/local/soudan/contact.html>



■ともに生きる：広島県広島市から(2)■

424号でご紹介した広島市立基町小学校は、小規模校ながら、その土地柄、帰国・外国人児童が多く集まり、全校児童の約50%を占めています。ここに、日本語指導教室「世界なかよし教室」があります。ここでは、外国につながるのある子どもたちにきめ細かな指導が行われています。424号に引き続き、長年担任として子どもたちと関わっている栗栖佳代さんに、その具体的な指導の様子を教えてくださいました。



世界なかよし教室
広島市立基町小学校教諭
栗栖 佳代

◆わんぱくな子どもたち

現在「世界なかよし教室」には教員が7名（常勤5 非常勤2）配置されています。教員が7名もついているのは特別で、日本語指導拠点校であること、児童の半数が外国ルーツであることなどが考えられます。7名のうち1名は広島市の日本語指導コーディネーターを兼務しており、非常勤の内1名は中国人のスタッフです。

指導するのは主に日本語と国語ですが、その児童の状況に応じて算数や社会、道徳なども取り出し指導をしています。日本語教室で道徳？と思われるかもしれませんが、外国ルーツの子どもは、さまざまな決まりや約束がある日本の学校生活に戸惑うことも多く、道徳での学びを通して、自分をみつめたり、友だちとの関わり方を学んだりすることが必要だと判断したためと思われます。とにかくわんぱくな子どもが多いのです。

◆国語、日本語

日本語指導の方法はその教師により異なります。担当する児童が決まると、その子どもの日本語の習得状況をみて教師が教材を選定します。文科省や東京都のダウンロードできるテキスト資料を使用したり、市販の年少者用の本を使ったりすることが多いようです。年度途中で児童が編入すると、時間割の関係で1人の児童を複数の教員がみることにもなります。その場合には、『みえこさんのにほんご』（注1）をメイン教材として使用しています。指導形態は少人数での個別取り出し指導と在籍学級への入り込み指導です。私がいま担当している児童は1年生から6年生まで7人です。

国語は、教科書の主な単元と小単元を扱います。できるだけその単元で求められている学習評価の3観点（知識・理解／思考力・判断力・表現力等／主体的に学習に取り組む態度）から外れないようにしたいと思っていますが、在籍学級と同じようにすべてを網羅できるわけではありません。もちろん来日したばかりの児童に国語は難しいため、ある程度日本語の習得が進んだら始めます。日本に定住もしくは長期滞在する予定の子どもには文字指導を並行して行います。読解力や作文力も重視します。それから、文字情報が多いと理解が難しくなるため、できるだけ視覚的な支援をしています。

日本語初期指導の段階から入門、初級段階の子どもに対して、私は『日本語学級1』『日本語学級2』（凡人社・大蔵守久著）をベースにした指導項目表を個別にファイルして進捗を確認しています。授業で扱う項目はある程度決めて準

備をしていますが、実際にはその日のその児童の様子を見て指導する語彙や文型、内容を決めることも多いです。

◆機を逃さない

ご存知のように子どもは 45 分間黙って椅子に座っているわけではありません。せいぜい集中力が保てるのは 10～15 分。1 つのコマに 3、4 種類のメニューを用意しておきます。また、子どもが新しい表現や文型を身につけるのは、その子がそれをしたいとき、必要とするときだと思います。その機を逃さないことが大切です。そのためには子どもをよく観察することです。場合によってはわざといじわるなことをすることもあります。

例えば、鉛筆を削りたい子どもは「鉛筆削り」と単語で言う、または「鉛筆削り貸して」と言うでしょう。「どうしてですか？」と聞きます。すると「鉛筆が短くなった」とか、「鉛筆が…」と何と言えればいいかわからなくなります。そのときに鉛筆の芯を指して、「丸まった」と教えます。子どもが「鉛筆が丸まったので鉛筆削りを貸してください」と言ったら、「うーん、もっと丁寧に頼んでください」と言い返します。仕方なく子どもは私が示す文型を使わざるをえません。「鉛筆が丸まったので鉛筆削りを貸していただけませんか」このような長い複雑な表現が一年生でもできるようになります。

◆教科書で教える

私が特に意識しているのは「教科書を教える」ではなく「教科書で教える」ということです。教科書に出てくる登場人物の会話文を繰り返し練習しても意味がありません。肝心なことは、目の前の子どもが自分の生きた言葉として習得できるようにすることです。また「わかりましたか？」と子どもに聞かないようにしています。どこの教室でも先生が「わかった？」と連呼していますが、わかったかどうかは、先生の指示通りにできるか実際の行動で確認するなど、他の方法で確かめることをします。例えば「ずつ」や「まとめる」「ばら」といった言葉はリングやおはじきなどを使って、「腰をあげる／おろす」「～たり～たり」といった表現も、実際の動作の中で繰り返すことで獲得することができます。

◆中学校に向けて

中級及び中級以上の指導は大変難しいです。小学校でどこまで支援できるか課題です。待遇表現、談話構成、新聞やニュースの要約、物語の再話、会話をリードする力など、いまの子どもたちにはハードルが高いです。生活体験の不足や家庭環境も影響します。DLA（注2）のレベル5、あるいはそれに近いレベルになれば在籍教室に戻しますが、実際には段階的に様子を見ながらということになります。

例えば、国語の物語文の単元は在籍教室で、説明文の単元は日本語教室で学習するという方法です。登場人物の気持ちを考えたり話し合い活動をしたりするときには他の友だちの意見を聞くことができます。また集団の中で「理解したことを伝える」「感想を発表する」ことで自信につながります。また6年生は中学校への申し送りの際に児童の学習の様子をDLAの結果とともに伝えていきます。本校の校区の中学校には日本語教室があり、引き続き指導の必要がある場合には連絡します。

このように、さまざまなケースがある中で、家庭とも連携をとりながら、児童の実態に合わせたきめ細かい支援ができるよう努力しています。

広島市立基町小学校ホームページ

http://cms.edu.city.hiroshima.jp/weblog/index.php?id=e0890&type=2&date=2020331&category_id=7147

（注1）『みえこさんのほんご』

公益財団法人三重県国際交流財団発行の日本語指導のテキスト

<http://www.pref.mie.lg.jp/gakokyo/hp/27461025557.htm>

（注2）DLA

文部科学省が国立大学法人東京外国語大学に委託して開発した「日本語能力測定方法」

https://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/clarinet/003/1345413.htm
